

目次

はじめに…… 4

生命の科学の

始まり

生命論的世界観…… 10

分子生物学の誕生——やはり機械論か…… 11

1953年、20世紀最大の発見——分子への傾倒…… 13

クリックとブレンナー——セントラルドグマ…… 15

調節——なんて生きものらしい…… 19

日本での小さな体験…… 20

「遺伝子」から

「細胞」へ

世紀の発見をした青年のその後…… 26

ワトソンという特異な存在…… 31

学問の基盤として書かれたもの…… 32

たしかな実感のある学問…… 35

多細胞に挑む… 36

組換えDNA技術の登場… 38

1975年、アシロマ会議… 40

眞剣な教科書製作者であればこそ… 41

1983年——遺伝子から細胞へ… 43

旗振り役と実行役… 44

日本語訳があるということ… 46

教科書は時代とともに… 48

図版が示す印象的な変遷… 50

「生命の起源と初期の進化」章の登場… 53

「植物細胞」「神経細胞」章の消滅… 55

前向きな削ぎ落とし… 56

社会に与える影響、社会から受ける影響… 58

感染症… 59

Life Science と生命科学

1970年のLife Science… 65

1970年の生命科学… 67

「生命科学」を活かそう… 70

世界観を持つ… 72

自然そのものに向き合う自然科学… 75

DNAは遺伝子ではなくゲノムとして、そして情報… 77

変わるもの・変わらないもの——教科書も学問も超えて… 82

あとがき——最後に思うこと… 88

文献… 92